Hクロイツ（一八九六―一九〇七）
Hコボルト（一九〇七―）

右の中、クリユゲル時代からはプロイセン國文部大臣の保護と天文協會（Astronomische Gesellschaft）の援助が加つて今日に及んでゐる。大論文があれば、それはシツマヘル時代既に補欠號（Ergaenzungshefte）を出したことがあるけれど、其の後中絶したのを、後にクロイツ時代に至つて之れを復活した。コボルト時代になつて一九一三年文獻附錄（LiterarischeBeiblatt）を別に發行し、近頃一九一九年夏以來、又、觀測報（Beobachtungs-Zirkular）なるものも發刊するに至つた。現在は第二百十四卷目を出してゐる。之れは今日、天文學上の專門雜誌として第一流のもので、專門家は一刻も此の雜誌から眼を離すことが出來ない。

火星より無線電信傍把

（紐育合同通信一日發）マルコニー氏は快走船エレクトラ號に於て火星よりの無線電信を傍把せりマルコニー氏が火星より傍把せる無線電波の延長は既に世界にある最高威力の無線電信所のそれよりも大なりと。此の電報が各新聞に揭載されたのは去る九月六日であつた。しかし之れは大なる誤りである。火星は其の當時、地球から言へば太陽と合の位置を過ぎたばかりで、吾々からの距離は七千萬里の遠方にある、若し火星に人類が居るならば、此の地球人類の騷ぎを笑つて。

『始めて天體相互通信に、御互ひがわざわざ遠く離れてゐる時機を撰ぶ馬鹿があるものか。來年の春まで待てば、一千七百萬里に近づく時があるじやないか』

と言ふのでありませう。左に日下部博士の談があります。

東北大學の日下部博士談

新聞紙上で又も紐育發でマルコニー氏が火星からの電波を受けたとの通信が見えますが昨年一月頃と記憶して居ます既に昨年春火星から電波を受けたとしたならば

學術界では今日迄等閑にして居る譯がないのに又も宣傳したと云ふのは所謂例の米の宣傳主義でたしかにマルコニー會社の廣告的宣傳と云ふも過言ではありますまい世界の無線電信より一層強い電波を感じたらどんな惡い機械でも感じなければならないそれを尤も弱い電波を感じたと云ふならマルコニー氏の發明の機械の良い事がわかるが強い電波であつたと云ふから

原の町の無線電信所にも感じなければならぬ殊に歐州諸國の各地の無線電信所では感じたと云ふ事を報導して居ない唯マルコニー氏の快走船で感じたと云ふ事は實にあやしいです如何にして火星と云ふ事が確信され樣か第一太陽からは種々の現象で極光や磁氣あらしを現出するので常に發電し地球上に色々と影響して居る事は今昵々する迄もないがその

太陽からの電波につき研究もせず否定もせずに火星からとの推定はマルコニー氏の發言とも思はれない電波も光線と同じ事で發電體に近ければ強く遠ざかれば弱くなるのは距離の自乘に逆比例するのでマルコニー氏の快走船附近空中からの發電にても機械に作用したものに非ざるか若し火星からの通信なら一回に限らず日に何回も限りなく電波を送り各所の機械に同時刻に感じなければならぬ電波の地球を通過するには一秒時間の何十分の一と云ふ時間で先づ時間がないと云つてよい我々が夜

宮城野原に行き鈴虫の聲を聞いてもそれは前後左右何れよりの聲であつたかは一聲や二聲ではとても方向などわかり樣もないそれに無線電信機械と云ふのはその耳以下であるから**方向**などわかる樣がなく夫で火星などと早我點するの愚も甚だしい事と思ひます要するに去る一日に感じたものが**今日未だ學界**に噂になつてない事を見ると昨年春のと同樣に世界に向つてマルコニー會社の存在と機械の發賣方につきての一種の考案した世界的廣告の宣傳ですから若もたしかに感じたものであつたなら我々の

大に研究すべき事柄だが今日の場合一種の新聞的電文であらうと思ひます云々

（新東北、九月八日）